

近松の旅

園田学園女子大学 近松研究所

冥途・黄泉の旅芝居に赴き給ふ——これは、正徳四年（二七二四）九月十日、竹本筑後掾が亡くなったことを記した『今昔操年代記』の記事です。もちろん、この「旅芝居」というのは比喻表現ですが、生前、元禄期の筑後掾（義太夫）は、文字通り「日々旅にして、旅をすみか」としていました。たとえば、元禄八年（一六九五）。三月、義太夫は尾張国児玉村にいました。門弟（竹本新太夫・喜内）や三味線弾き（竹沢権右衛門）、人形遣い（小山庄左衛門）らを連れての旅興行です。児玉村で五月九日まで興行した後、十七日からは杉村で（以上、『黠鷗籠中記』）、七月は京都の伏見で興行していました（『見聞予覚集』）。居続けたのかどうかは分かりませんが、九月にも伏見御香宮で興行しています（『御香宮三木家文書』）。明けて、元禄九年の四月には紀州の新堀へ（『家乗』）、とい

つた一年でした。

これは、義太夫だけのことではなく、たとえば、『家乗』によると、元禄期、上方の宇治加太夫（加賀掾）（元禄五年一月、三月）、伊藤出羽掾（元禄六年一月）、竹本内匠・喜内（元禄九年五月）が紀州で興行しています。歌舞伎役者でも、たとえば、坂田藤十郎と「甲乙なき両輪の役者」と言われた山下半左衛門は、元禄十三年、京都での興行ができなくなり、八月、奈良へ巡業にをかけています（この巡業を当て込んで、翌年『けいせいならみやげ』を上演しています）。

旅興行は、名人・上手であっても、この時期ふつうにあったのです。義太夫も、筑後掾という名誉称号を朝廷から授けられた後も、たとえば、元禄十五年、正月には名古屋尾頭町おとうちまち、三月には名古屋あやめ町あやしま万松寺下で（『鸚鵡籠中記』）、そして、八月には伊勢の津八幡祭で興行しています（『津市史』）。『曾根崎心中』が爆発的にヒットする前年のことです。『今昔操年代記』が、筑後掾の芸人としての誉れは輝かしいものだが、「ほつこりとした蔵人なく。三八の十八にて、合はぬそろばん。胸算用合ふて、合はぬは世間なみ」と記す通り、常小屋で興行をし

続けることの難しさが窺えます。

ところで、右の津八幡の興行については、太夫 竹本筑後掾、ワキ 竹本喜内・佐内はじめ、三味線弾きや人形遣いはもちろん、口上なども含め、三十人ほどの一座の人々の名前が記録されています。その中に、作者として近松門左衛門の名前も見えます。この旅興行に近松も同道したのでしょうか。

元禄十一年八月十日から、筑後掾は名古屋尾頭町で興行を始め、九月二十九日には尾州公別邸での酒宴の席に呼ばれています（『鸚鵡籠中記』）。この期間、近松はどうしていたのでしょうか。『金子一高日記』によると、八月十六日以降、毎日、一高（金子吉左衛門）の家で節句替りの狂言の相談をしています。狂言作者として、役者のいる（劇場のある）京都を離れられなかったのです。

これは、歌舞伎にかかわっていた時期だけのことではありません。年代は不明ですが、近松晩年と思われる、伊勢屋清兵衛宛ての近松の書簡が二通残っています。紀州行辞りの文、尾崎行辞りの文と呼ばれているもので、誘いに対して、それぞれ紀州行き、尾崎行きを断る内容が記されています。その断りの理由が、

いずれも「浄ルリ替り前」「替り浄留り之相談」、すなわち次の浄瑠璃の準備のためだったのです。前者では、その準備は「私ならぬ義」ともあり、太夫などの演者、座本竹田出雲などの劇場関係者などをまじえての相談なり、執筆なりだったのでしよう。

つまり、専属的な作者となるまではともかく、狂言作者・竹本座の座付作者となつてからの近松に、旅に出る時間的余裕はなかったと思われます。また、近松を座付作者に迎えてからの竹本座は、元禄期のように一年のほとんどを旅に過ごすような興行ではなくなりました。旅興行をしていた芝居が作者を得たことで、常小屋での興行を可能とすると同時に、皮肉にも、その作者は旅をすることができなくなつたのです。そのような近松の生涯における最大の旅は、十代後半、生まれ育つた越前から京都への、一家挙げての移住だったと言つてよいでしょう。まさに作者近松への旅立ちでした。

(井上 勝志)